



背景

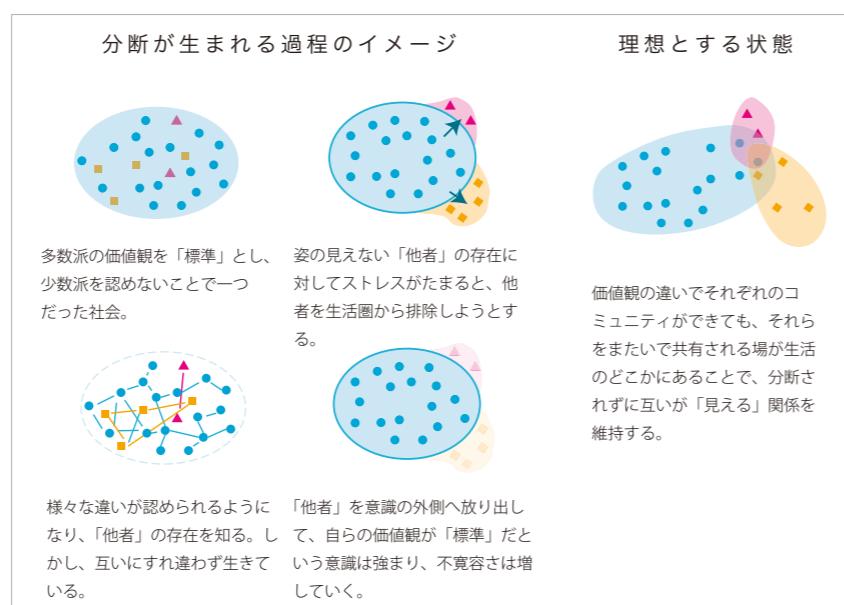
近年、人々の他者に対する不寛容さが増しているように感じる。例えば、国境や文化圏を超えた人々の移動が増えるとともに世界のあらゆるところで排他的な思想が力を持ち始め、また様々なマイノリティに対する配慮や援助を「逆差別である」と批判する声も聞くようになった。この不寛容さの根底には、多様性という価値観の副産物としての他者への無関心、あるいは他者の存在を考えたくないという意識があると考える。

あらゆる他者の存在がストレスなく許容され、皆が都市の生活に接続できるような大きな器が必要とされているのではないか。

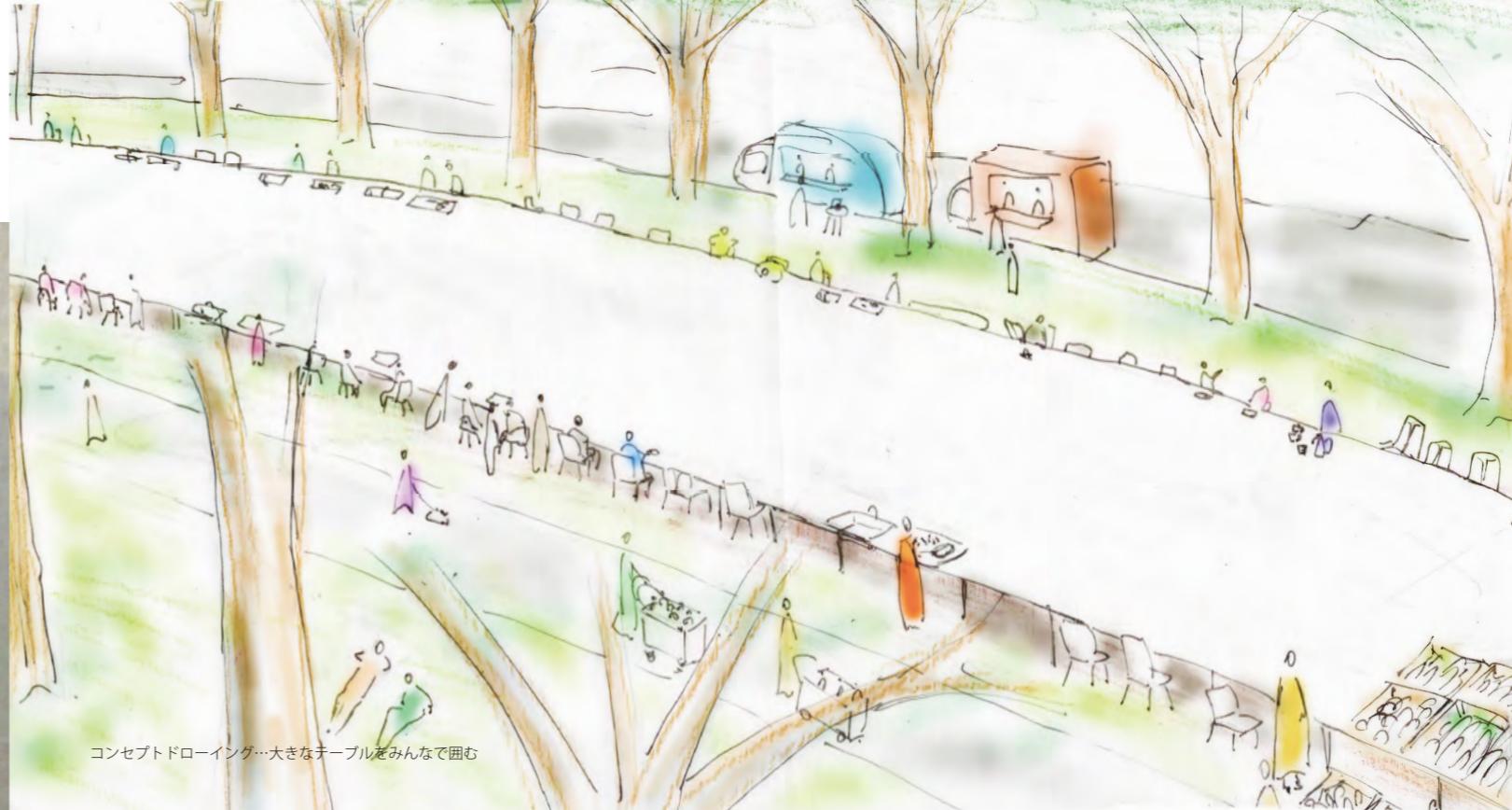
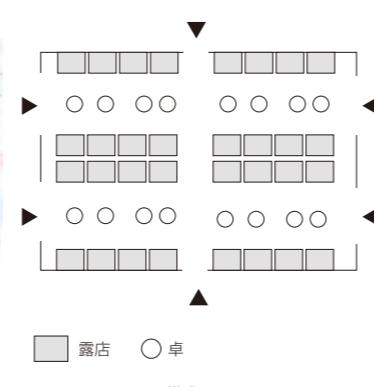
「食べること」を通して他者と共に過ごす

「大きな器」のきっかけとなり得る普遍性を持った行為として、食事について考えた。食事を人と共にすることで人との繋がりを感じるということは、文化の違いを超えて共通する価値観である。

市民という単位で食事空間を共有する事例として、シンガポールのホーカーセンターが挙げられる。シンガポールでは毎食を外食で済ますのが一般的であり、これを支えるのが多種多様な露店の存在であるが、これらを集積して清潔な調理設備と屋根のついた食事空間を整備したものがホーカーセンターである。多様な民族・宗教の人々が、各々の食の制限や嗜好の別に関係なく、一つの屋根の下で毎日の食事の時間を共有している。



ホーカーセンター：内観



敷地：横浜・関外地区

関外地区について

関内・関外地区は、開港以来横浜の都心として発展したエリアであり、南北を丘陵に挟まれた低地（埋立地）に都市機能が集中している。外国人居留地設置当初の関所に由来して、派大岡川（現存せず）を境に臨海部は「関内」、内陸部は「関外」と呼ばれ、関外地区は港湾労働者の町や商業地、歓楽街などとして栄えた。



リサーチ：関外地区の多様性

多民族の街

関外地区的総人口に対する外国人の割合は日本でも有数の高さであり、総人口のうち 22% にのぼる 13972 人（2015 年時点）が外国人である。福富町（韓国人が多く住む）や若葉町（タイ人が多く住む）など、中華街のように特定の国籍の人々によるコミュニティができる街もある。しかしながら、街に点々とある外国料理・食材店などを見かける他に外国人の存在はほとんど見えてこないので実状である。



全体平面図 (1/3) S=1:1000

多個性の街

かつての派大岡川上に位置するJR 関内駅付近には高層オフィスビルが立ち並ぶ風景が見られるほか、伊勢佐木町1・2丁目など繁華街が位置する。

内陸側へ進むにつれて高層住宅街や低層住宅街が増え、地域密着型の商店街などが現れていかにも長閑な住宅街となる。巨大なマンションが立ち並ぶかと思えば、スケールの小さな戸建て住宅地も現れる。

ほか、簡易宿泊所の集中する寿地区や風俗店が集中する曙町や福富町など、ピンポイントで特殊化したエリアも存在する。



大通り公園：運河の時代との比較



JR 関内駅近くは、舗装された広い地面がまっすぐ伸びる整然とした空間である。イベントなどで広さを存分に使った会場がしつらわれることはもあるものの、日常においては、がらんとしてよりどころのない空間には、通行人をパラパラと見かけるのみである。対して、横浜根岸道路を挟んで西側は、土の地面から生える大きな樹木に囲まれた空間となっている。両側には、首都高速根岸出入口につながる2~4車線の広い道路があり、交通量や土地の高低差も相まって周囲の街との関係は一層薄く感じる。

大通り公園：現状

目的

都市民の大きな器となる公共の場とは、町内会のような過度に親密なコミュニティでもなく、あるいは都市公園のような縁無き空間でもない。都市の中でバラバラに生きる人々のあらゆる暮らしの姿を受け入れる大らかさを持った公共空間とはどのようなものか、「食事を共にする」というテーマから考えていきたい。

設計方針

大通り公園に閑外全住民（約6万人）の食事空間をつくる。

大通り公園は、閑外中央部を東西に貫く総延長約 1.2km、幅約 30m~40m の細長い公園である。ここはかつての運河（吉田川、新吉田川）の跡地であり、1978年に横浜市六大事業の一環で埋め立てられ、公園として整備された。

大通り公園の長大さは、混沌とした閑外の街々の住人たちを柔らかく繋ぎ、豊かな共存を実現する可能性を秘めている。しかし、都市の中心にありながら閑外の人々の公共空間としてあまり浸透していないのが現状である。

閑外の住民たちによる様々な食の風景が、この長大な一つの空間に覆われることにより、全体におおらかな一体感を生み出せると考える。



敷地周辺の既存プログラム

Diagram

大通り公園は周囲の街と関係を持たず、空白な場所になっていています。



周囲の「食べる」という行為の場を公園に設ける。それぞれの「食べる」が現れて、公園の巨大な空白を彩っていく。



敷地の周囲から引き出されたプログラム



全体模型写真



横浜橋商店街付近

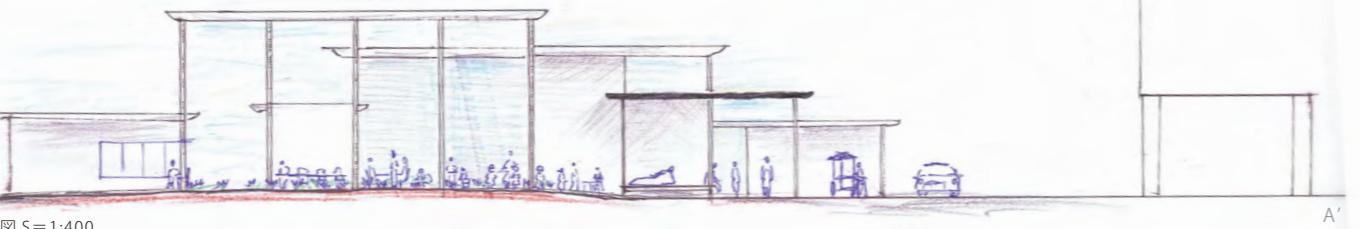


阪東橋交差点より



多様性を標榜する21世紀の世界では、価値観の違いと共に分散し続ける人々をどう分断や排除なくつなぎ止めるかが今後も重要な問題になっていくだろう。

関外の街は、6万人の食卓を持つことでそれに答える。日本人と外国人、若者と高齢者、健常者と障がい者、富める人と貧しい人などのあらゆる違いを、食べることへの普遍的な喜びが覆う。これにより、分断なき多様性社会を実現した都市生活の姿が描けると考える。



A-A' 断面図 S=1:400



横浜橋商店街より



JR 関内駅側より